2023年4月16日　朝 礼 拝 順 序 (午 前 10 時 半)　(№16)

司式　杉山昌樹牧師

前　奏　奏楽　森永美保姉

開 会 招 詞　詩編96編1－4節

＊ 賛 美 歌　１５:１（ソングシート）

1. わが主の御業は　ことごと正し、妙なるみむねに　凡てを任せん。

主はわが神なり、ともしき時の　わがたすけなり。　アーメン

＊ 開 会 祈 祷

罪 の 告 白　祈祷書2　罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。　主イエス・キリストの御名によって。アーメン。　(詩編51)

罪の赦しの宣言

十　戒　祈祷書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。　(出エジプト20、申命記5)

＊ 賛 美 歌　１５：２（ソングシート）

2. わが主の御業は　ことごと正し、あらしの中にも　安けく憩わん。

主はわが父なり、なやめる時の　わがすくいなり。アーメン

公同の祈祷　15　復活節 主の復活

力の主なる神さま、あなたの御子、わたしたちの主イエス・キリストの、栄光に満ちた復活を覚えて、御名を心からほめたたえます。あなたは、御力によって、主イエスを死人の中から復活さ

せられました。墓からよみがえられた主は、わたしたちを罪の縄目と死の恐れから解放し、勝利を宣言してくださいました。あなたは、全て彼を信じる者に、神の子らの、栄光に輝く自由にあずかる特権をお与えくださり、永遠の命を約束してくださったことを感謝します。今、よみがえりの主が、わたしたちと共にいますことを覚えて、御名を心から賛美します。アーメン(Iコリント15、ローマ6〜8)。

信 仰 告 白 式

献　　金　　（黒）教会活動（赤）盛岡伝道所　　70

今献ぐるそなえものを　主よ　清めて受けたまえ　アーメン

聖　書　朗　読　　エゼキエル34章22－27節（旧約聖書1353頁）

ヨハネ20章19－31節（新約聖書210頁）

説　教・祈　祷　「この真ん中に」杉山昌樹牧師

＊ 賛　美　歌　３４:１，３（ソングシート）

1. 1.あゝ主のひとみ　まなざしよ　きよきみまえを　去りゆきし

富める若(わか)人(うど)　見つめつつ　なげくはたれぞ　主ならずや

3. あゝ主のひとみ　まなざしよ　うたがいまどう　トマスにも

み傷(きず)しめして「信ぜよ」と　宣(の)らすはたれぞ　主ならずや。アーメン

＊ 主　の　祈　り　　祈祷書1

天にまします我らの父よ
願わくは御名をあがめさせたまえ
御国を来たらせたまえ　御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり　　アーメン。

＊ 頌　　栄　　６６

世をこぞりて、ほめたたえよみ さかえつきせぬ、あまつかみを。アーメン

＊ 祝　　祷

後　　奏　　(黙祷)

報　　告 司会加藤良明長老・受付古澤兵庫長老（次週：那珂百合子・雨宮信長老）

本日　受付　１階：星野房子・若月学執事　２階：藤井牧子執事　／ZOOMホスト・録音：番場験也

次週　受付　１階：大日南隆夫・佐藤紀子執事　２階：森永美保執事　／ZOOMホスト・録音：森永翔馬

ヨハネ20章19－31節「この真ん中に」

幸いな人

　ただいま礼拝の中で信仰告白式を行うことができました。私たちにとって大きな喜びです。しかし、何よりも喜ばしいのは信仰を告白視されたご本人です。なぜなら今日の聖書の29節でイエス様ご自身がそのように言ってくださっているからです。「見ないのに信じる人は幸いである」。イエス様のお姿を直接まじまじと見ることはなくても、イエス様が今ここに共にいて下さることを知って、イエス様のご復活を知って、それを信じる人は幸いだ、とほかでもないイエス様が言ってくださっています。私たちはだれであっても「イエス様を信じます」と言ったその時から、この幸いな人になります。そのために必要なことはただ一つ、イエス様とお会いすることです。そしてまさに今日の聖書には復活したイエス様と会うことのできた弟子たちのことが記されています。

やってくるイエス

　この所は二つの週の様子が描かれています。どちらにも共通するのは、弟子たちの所にイエス様がやってこられるという点です。それも建物の隔てを超えて自由にやってこられています。これはイエス様がこの時、すでに復活された霊的な体であることを示しているように見えます。そのようにしてやってこられたイエス様は、10人の弟子たちに対して、あるいはトマスに対して、ご自身の手の傷、脇腹の傷を見せておられますから、ここで現れたのはあの十字架で死なれた本物のイエス様です。このように、人間の体を持っているけれども、それは、同時に霊的な体でもある、というようなありかたは、正直なところ、私たちにはよくわからないところがあります。しかし、そのような復活の体がどのようなものであったとしても、このところで大切なのは、イエス様は、自由に弟子たちの所に来て下さった、というこの事実です。そして、このイエス様の自由さということにこそ、わたしたちの希望があります。なぜなら、イエス様はいつでも、自由に、ご自身の思うとおりの仕方で、私たちの所にやってこられるということを今日の所は示してるからです。ただし、一つだけ、現代においてはこの時の弟子たちと違うところがあります。それは、今のこの時代には、イエス様は聖霊によってやってこられるという点です。このヨハネによる福音書の3章では、聖霊が風に譬えられていました。風は確かに存在しますし、体で感じます。同じように、聖霊なる神さまもまた、私たちの間を吹き抜けていきます。そして、例えば今、こうして集まっている私たちのこのところにこられ、こうして語っております言葉の中で、ご自身の働きを始められるのです。このように室内にいて何もないと思っているこのとこで、突然、言葉と共に、聖霊なる神さまが吹き付けるようにして、私たちにイエス様を指し示すのです。

閉ざされた戸

　そのようにしてイエス様がやってこられるのはもちろん、目的があります。このところで、弟子たちは、家の中で硬く戸を閉じていた、というところから話が始まっています。その理由は、ユダヤ人を恐れていたとある通りです。イエス様をとらえ、十字架にかけて殺してしまった人たちは、さらに自分たちをもとらえて処刑してしまうのではないか、そのように考えていたのでしょう。実際にそれは、ただの思い煩いではなく、むしろ、キリスト教の最初の数世紀においては、いつでも現実味のある恐れでした。この時、弟子たちはすっかり恐れに取りつかれてしまっていました。そして、このところで描かれている閉ざされた戸というのは、もちろん物理的にも外と内を区切っていますけれども、そればかりではなく、弟子たちの心のあり方をもあらわしているように見えます。このような意味で、日々、どのような思いで生きいるのか、ということは弟子たちだけではなく、私たちにとっても問われることかもしれません。それで正直に言いますけれども、わたし自身のことを振り返りますと、恐れたり、心配したりすることが多い方かな、と思います。あれやこれや、ちょっとしたことまで気にして、ああでもない、こうでもない、と心配してしまうところがあるような気がするのです。その意味では人間は弱いものかもしれません。

真ん中にある平和

　しかし、聖書によりますと、この時、うちにうちにと凝り固まった弟子たちのその真ん中に、イエス様は自由に入ってこられています。「そこへイエスが来て」という言葉は、うれしい言葉です。混乱

している心、閉じている心、悲しんでいる心、そのような弟子たちの真ん中に、イエス様が立っておられるのです。そして、ただ立っておられるだけではなく、「平和がある」と言ってくださいます。この平和は、イエス様が、十字架の直前、過ぎ越しの食事の後で、弟子たちに残した言葉を伝える箇所で、このように言われていました。「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」。ここで注目したいのは、「私の平和を与える」と言われていることです。イエス様が持っている平和です。それは、言うまでもなく、神様とイエス様との間にある一致であり、完全なまじわりのことです。神様とイエス様とが一体であって、大変安定している、何があっても揺らがない、あの平和です。そのような圧倒的に力強い、一本芯の通った平和をあなたにあげる、というのがイエス様の約束でした。そのような平和が、この時「あなた方にある」と言われたのです。

派遣される弟子たち

しかもここではさらに、イエス様はご自身の手と脇腹とを弟子たちに示しておられます。ほら、私だ、というように、イエス様が目の前で語ってくださっているのです。当然ですが、弟子たちは喜んでいます。しかし、この再会はそれだけで終わるのではなく、全く新しいことの始まります。それは、この先も弟子たちが、ずっと、イエス様と一緒に居続けることの始まります。イエス様は、もう一度、あなた方に平和がある、と言ってくださいます。そして、その平和のありかたとして、弟子たちの派遣を言うのです。そこではっきりと語られていることがあります。それは、父がわたしを遣わしたように、あなた方を遣わす、という言葉です。これは、まず、神様とイエス様とのありかたを示しています。父なる神さまがイエス様を遣わしたその仕方は、イエス様をただぽつんと置いておく、寂しく地上を歩むままにしておく、というものではありません。そうではなく、どのような時にも、神様とのつながりの中においておくそのようなあり方です。イエス様が地上を歩まれるときも、神様との関係は、あの十字架の時を除いて切れることは一切ありませんでした。この事を前提として、イエス様は弟子たちと切れることの無い霊のきずなの中で、この先の人生に送り出す、と言われたのです。そして、そのような決定的なきずなを作り出すものとして、聖霊を受けなさい、と言ってくださっています。この聖霊のつながりにおいて、この先弟子たちが、どれほど、厳しいところに置かれたとしても、実際に弟子たちは、最初に確認しましたように、ユダヤ人たちから何らかの妨害を受ける危険と隣り合わせだったのですが、しかし、そのような時にもいつでもイエスさまと、そして神様と一緒にあることができると、この時約束をいただいたのです。それは私たちにとっても同じ約束と見てよいのです。神様とイエス様とがつながっているように、イエス様と弟子たちとを、そして私たちをも一つにつながるのです。それが、聖霊を受けなさい、という言葉の意味です。そしてこのイエス様とつながるところ、どのような罪であれ赦され、神様の命があふれていくのです。

信じたくない？

ところが、ここでは、最初にお話しした通り、なぜか、二週にわたって弟子たちが部屋にこもっていたということが報告されていました。そして、二番目の週の出来事の中心にいるのはトマスでした。ある意味では、ここはイエス様とトマスの直接対決と言ってしまってよい内容です。それで、このようなことが丁寧に描かれているその理由は、「信じる」ということについて、深く知るためのように思えるのです。この所で、トマスの語る言葉は、考え得る限りひどい言葉のように見えます。それはとても強い拒絶に満ちていました。すなわち、彼の宣言はこうでした。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をその脇腹に入れてみなければ、私は決して信じない」。この時、トマスがイエス様の手の釘の跡を見てみたい、脇腹にあるはずの槍の傷跡に手を入れてみたい、と心から願っていたのかどうか、いまとなってはよくわかりません。むしろ、この時トマスは、自分の不信仰の理由を一所懸命言いつのっているようにも見えます。

イエスと向き合う時に

ところがイエス様は、そのようなトマスの前にまたしても自由に姿を表しています。そして、トマスに自分が言った通りのことをするように迫っています。これは理屈ではありません。イエス様が迫ってくるのです。さあ、さあ、と言ってご自身を現わしているのです。こうして、目の前にイエス様を見た

ときに、トマスのそれまでの頭の信念は崩れています。それに続いてイエス様の命令は、「信じないものではなく、信じる者になりなさい」と言われたのでした。これに対して、トマスは、「はい、信じます」とは言っていません。そうではなく、自分の心に湧き上がる言葉として「私の主、私の神」と言っています。改めて、イエス様に対して目が開かれるのです。そしてこれこそが確かな信仰告白の言葉です。そこで大切なのは「わたしの」という言葉です。私としてこうだ、というのです。他の人がどう言うのかではなく、私の、この私にとって、イエス様とは、人生の導き手であり、神様そのもの、神様と出会わせてくださる方、なのだ。このように答えているのです。そして、このこと、イエス様を人生の導き手とする、というのを言い換えれば信じるとなります。どのようなことがあろうとも、たとえつらい状況になろうとも、イエス様がいる、ということに信頼して歩むのです。

信じるため

　それほど「信じる」ことは重要です。そもそも、このヨハネによる福音書が何のために書かれたのか、その目的を現わす言葉が、今日の最後の31節にあります。「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアと信じるため、信じてイエスの名により命を受けるため」です。ここでは、「命を受ける」という言葉が大切です。それもまた、理屈ではありません。イエス様を信じた人は、先ほどもお話ししたように、神様とのつながりにいられるのです。神様と、イエス様とつなげられて、神様の命の中に生き始めるのです。あの復活のイエス様から命が来るのです。私たちは誰であっても、イエス様を信じたときから、この命に生きるようになっています。

この真ん中に

　それであたらためて確認します。イエス様は、自由な方です。そして、いつでも、私たちのこの人生の状況の中にやってきてくださる方です。今、この時はもちろん、これからも、わたしたちが、喜んでいる時も、行き詰っている時も、私たちの真ん中に来て下さいます。そして、私たちの中に、あの平和があるようにしてくださいます。私たちは、この礼拝にも、次の礼拝にも、その先にも、ずっと、このイエス様をお迎えして歩むことができます。聖霊を通しイエス様にっていつでも神様と一緒に生きるものとされるのです。

祈り

主イエス・キリストの父なる神様。私たちは弱いもので、少し先のことさえ分からず、思い煩ってしまうことがあります。けれども、そのような私たちの人生の真ん中にあなたが来て下さることを信じます。そして、あなたに支えられ、あなたの平和に生かされていることを信じます。どうぞ、わたしたちが、この幸いを覚えて、この週も喜んでイエス様と一緒に歩むことができますように。そして、主イエスをわが主、わが神とたたえさせてください。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン